

目加田誠先生の『北平日記』 2

今回は目加田誠先生と『北平日記』のご説明をしました。今回は、『北平日記』の中に書かれたことからいくつかのエピソードを抜き出してご紹介します。

【日本出発から北平到着まで】

日記によると、昭和8（1933）年10月14日の夜9時45分に東京を出発しています。翌15日は京都を散策し、大阪の親類の家に一泊します。そして、翌16日神戸から船に乗ります。17日朝に門司に着き、出発まで下関の知人を訪ねます。その日の午後2時に出た船は3日目の10月20日午前7時には天津の沖に到着します。夕方天津から列車に乗って4時間強で北平（今の北京）に着きました。夜の11時を過ぎていました。それでも出迎えの人が来てくれていて、車で拠点ともいべき事務所（東廠胡同文化事業部）（註1）に着きます。

【留学当初のホームシック】

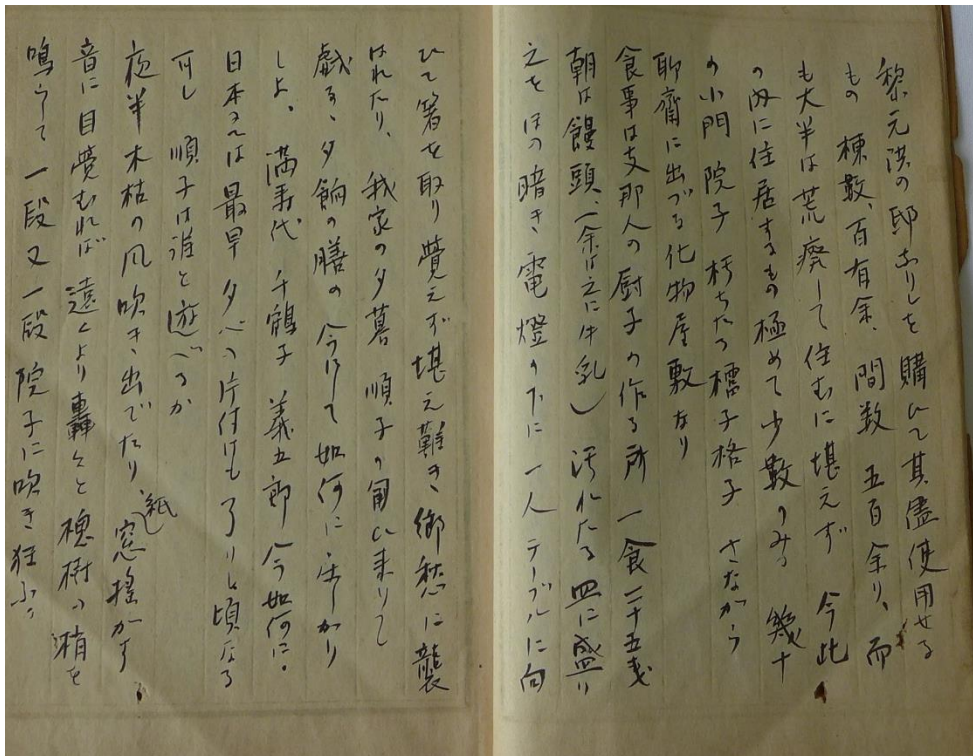
住む部屋は中華民国初めての軍人の邸宅であった古い屋敷の一部でした。荒れるに任せたような部屋で、『聊齋志異』（りょうさいしい）（註2）に出てくる化物屋敷（ばけものやしき）のようだと形容しています。電灯もほの暗く、ひとりさびしく汚れた皿に盛り付けられた中国料理を食べながら、日本に残してきた妻、生まれたばかりの長女、妹、弟のことを思い出します。

長女の順子さんは、当時生まれたばかりでしたが、刊行された『目加田誠「北平日記」』の跋文（ばつぶん：あとがき）に「北京に着いて早々にホームシックにかかっている様子は、寂しがり屋の父を彷彿とさせて笑ってしまいました。私の知らない、記憶にもない日本での家庭団欒（かていだんらん）の場に、赤ん坊の順子も混じっていた光景は、まるでタイムマシンに乗ったかのように心が躍（おど）りました。」と寄稿されています。

註1. 東廠胡同一東廠という場所のフートン（昔の細い路地）。

註2. 中国清代の怪異小説

【『北平日記』】



10月21日 左のページに家族への思いがあふれる記述があります。

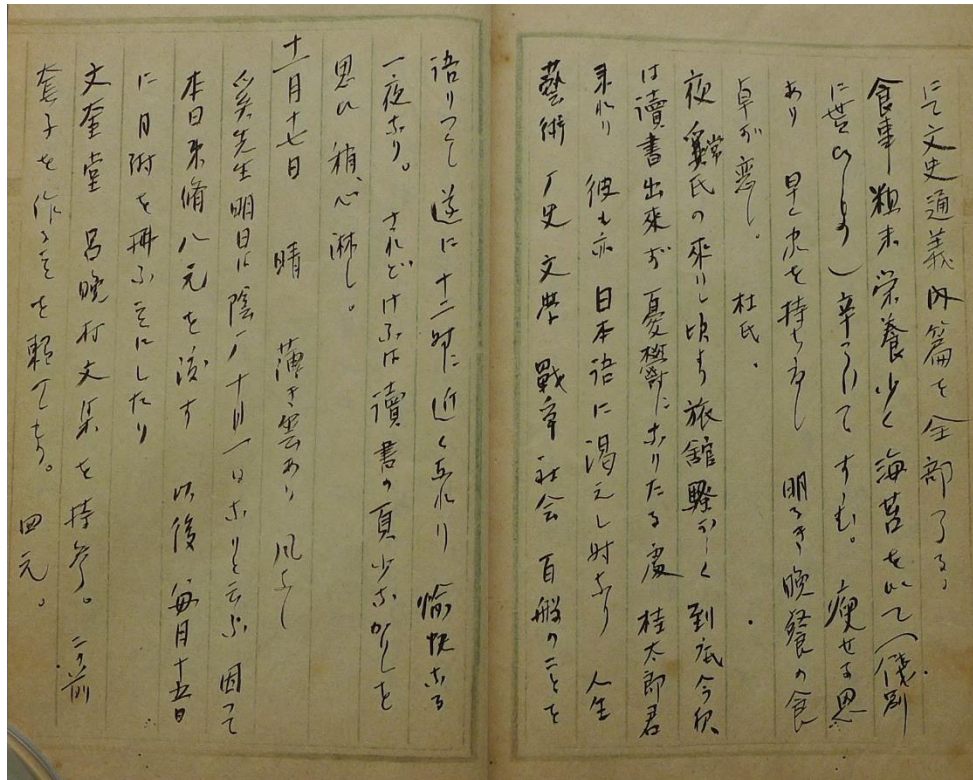
【留学初期 - 家庭教師】

初めに落ち着いた部屋はなじめず、日本式の一三館（ひふみかん）に決めます。本人には中国で日本式というのは不本意だったようです。

宿を決めると、中国語や中国の文化を学ぶため家庭教師に来てもらいます。中国語は張という青年、後には常啓光という青年、文化は奚待園という老人に『紅樓夢』（註1）を読みながら学びます。ほかにも趙君（当時の満州出身）という大学生、愈君（江南の蘇州出身）という青年と交換教授を行いました。奚待園という人は清朝の貴族だった人で、『紅樓夢』で描かれている貴族の生活を良く知り、著名な中国文学研究者であった吉川幸次郎も学んでいます。昭和9（1934）年2月5日の日記に、奚氏が以前宮中から賜ったという黄色の匂い袋を見せてくれたことが書かれていますが、静永先生の註には西太后より賜った品かとあります。西太后と言え、清朝の末期（19世紀末～20世紀初め）権力を握った女性です。西太后からもらったものならすごいことです。

【留学初期 - 食事】

日記には、食事についても記されています。着いた翌日の食事風景では、「食事は支那人の厨子の作る所、一食 25 銭。朝は饅頭（余はこれに牛乳）」とあります。饅頭は餡（あん）の入っていない蒸しパンで、中国の一般的な朝食の一つでした。それから数日後の 10 月 26 日は外食をします。食べたのは烤鴨子というもので、炭火で燻製にしたアヒル肉をパイ生地などでくるんで食べるものでした。その料理店では毛をむしったアヒルを何羽かぶら下げてきて客に選ばせる方式でしたが、先生はそれをあまり良くは思っていないような書きぶりです。また、牛乳の感想は「薄くして駄目なれば断る。」（11 月 4 日）とあり、気に入らなかったようです。また、11 月 16 日には「食事粗末、栄養少なく、海苔を以って（餞別にもらいしもの）辛うじてすすむ。」とあります。さらに、11 月 20 日には「潤明楼にて包子（肉まん）と麵を食す。旅館の栄養不足にして近頃身体痩せたるを恐るれば也。」とあります。留学の初期は食事に苦勞したようです。



11 月 6 日 2 行目に「食事粗末・・・」とあります。